

” 諸行無常 ” * を感じて

総合情報処理センター長 高森 年

情報分野における技術の進歩とそれに関する知識の変化・変遷のスピードには全く驚嘆の言葉を禁じえない。何処かで別のことを対象に、同じことを書いたような気がするのですが、情報分野における現象を見るにつけ、” 諸行無常 ” * とは、この世の現象の法則を表わしているのであり、人間はこのことを何時でも念頭におきながら判断・行動すべきものなのだなと思う。

さて、この度、はからずもセンター長として、総合情報センターの運営を任されることとなりました。ご承知の様に、本センターは、本学における情報処理機能に関する中枢組織として昭和57に発足して以来、約10年を経たわけですが、過去を振り返って見ると、その足跡の輝かしさと功績の大きさには目を見張るものがあります。言うまでもなく、その最大の功績は、高速・大容量の(その当時)大型コンピュータの利用サービスの提供により、総合大学としての本学のあらゆる分野の研究者に不可欠・有効な研究支援を長期に渡って実行したことであろう。また、本学独自の特色あるデータベースの開発とその利用、将来のコンピュータ利用形態を予測しての光ケーブル通信網の設置などは、本学の総合情報処理センターの名を全国的に知らしめたこととして記憶に新しい。

しかし、初めに述べましたように、この世のことは正に” 諸行無常 ” であって、センターを取り巻く環境は激変致しております。すなわち、ここ4~5年のコンピュータシステムは、デスクトップコンピュータを中心にダウンサイジング化・ネットワーク化・自律分散化へと進み、まさに革命的とも言える変化をとげる今や、個人用高性能ワークステーション(EWS)の廉価化のコンペが華やかに繰り広げられております。これに伴って、集中管理システムをきらう研究者のセンター離れは恒常化し、特に若い研究者にこの傾向が顕著となったことは当然の成り行きであろう。また、同様の原因で、最近のセンター会計の赤字が顕在化したことも容易に理解できるであろう。

このような時期にセンター長を引き受けたバカな奴のことについて議論することは、また別の機会に譲ることとして、この機会に、任期2年間のうちにどのような方針で当センターを運営する気持ちであるかについて、少し述べてみたいと思う。

私は、つね日頃、大学における研究所、センターなる組織はメンテナンスフリーの期間はせいぜい長くても発足から5年程度までではないかと思っている。それ以降は、なんらかのインパクト・刺激を与えないと急速に低位安定の状態となってしまう。では、インパクトとは何か? それぞれの所属する環境によって異なるが、大学に所属する組織においては学生を含む若い研究者の交流がそこにおいて活発に行なわれることが、最も効果的な刺激になると思う。このことは、総合情報処理センターにおいても例外ではなく、この種の交流を活発化することがセンターにとって大変重要なこととなる。ではそのためには何をすれば良いか? 出来る出来ないは別として、私は次のことに努力をしてみたいと思う。

* “言うまでもなく、” 平家物語 ” の冒頭の一節であるが、これは、「この世のことは、全て変化する」ということのみが変わらない真実である」との意味と解釈して頂きたい。

1. 情報関係講座との共同研究の促進、および例えば冠講座設置に向けての努力
2. ソフトウェアを中心に据えたコンピュータリソースの再検討
3. ネットワークとそのサービスの強化
4. 地域社会との結び付きの強化
5. 情報センタースタッフの能力向上

2年間でやることにしては結構盛沢山な様な気がするが、出来なかった点については次の人が気に入ればやれば良いと思っているからちっとも気にしていない。と言うことで、宜敷お願いいたします！

(平成4年度3月記)